

米国の地域方言と社会方言

ダニエル・ロング

5+ 地域方言・ 社会方言の諸相

1 方言の分類

ことばに見られる様々な種類の一つに、専門用語や敬語、女性語・男性語といった「コード」がある。方言もコードという概念に含まれるが言語体系の一部のみを指すこれらと違って、方言は言語体系全体を指す用語であり、そして個人の母語でもある。したがって、「アメリカ北東部英語の母語話者」や「広島方言の母語話者」とは言えるが、「女性の母語話者」や「敬語の母語話者」などとは言えない（ロング一九九六）。

日本でいう「方言」は主に、ことばの地域的変異を指す。知らない人に会えば日本人なら話し方からその人は東北人が九州人かは分かる。欧米の国々にもこうした「地域方言」はあるが、同じ町の出身の話者でも、その話し方だけで中階

級や労働階級かは分かることがある。すなわち、「社会方言」と呼ばれる変種がある。

アメリカなどでは、社会階層による言語の違い以外にも、民族による言語の違い、つまり、「民族方言」がある。例えば、同じニュージャージー州に住む同じ労働階級の人でも、白人と黒人はそれぞれ独立したコミュニティで暮らしている場合が多いため、それぞれの話し方が異なるといわれている。アフリカ系アメリカ人の間で使われる「黒人俗英語」は最もよく研究されている民族方言であるが、これ以外にも、ヒスパニック、ユタヤ系、アジア系などの様々な民族の英語の特徴も指摘されている（ロング一九九一）。

このような民族の違いによる方言の差は日本語にあるのだろうか。朝鮮半島や中国、アイヌ、欧米の先祖を持つ人で、日本語を母語としている人は多い。最近、二言語使用など彼

5+ 地域方言・社会方言の諸相

らの言語生活に関する研究が行われている。しかし、在日の二世や三世の日本語を特徴づけるものがあまりないため、現在の段階では民族方言は日本語にはないと考えられる。

2 社会階層と日本語の関係

日本にも欧米と同じような社会方言はないであろうか。現代の日本社会において、収入や学歴といった要因によってさまざまな社会行動に違いが見られる（子供を私学校に通わせるかどうかなど）が、社会階層によることばの差はあまりないようである。

その一方、日本語には、特定の職業で使われるコードが専門用語などの個別語彙、あるいは、特殊な言い回しに見られる。これも社会集団によることばの違いであるが、表現の違いに過ぎず、音韻や文法のような体系的な特徴ではない。また、これらの「集団語」は、親から子へと受け継がれる一話者の母語ではない。したがって、これらは本稿で言っている方言とは異なる。

かつての日本にも社会階層による言語の差が見られた。江戸時代に、上級武士と下級武士、商人、農民のそれぞれの使うことばには相違が見られた。真田（一九九一、一九二―二五頁）が挙げている大分県の例（表1）では、話者の社会階層によって使われる形態素が違っていた様子が明確に表れている。このデータを記録した福沢諭吉は「専ら中津旧藩士の情態を記したもののなれども、諸藩共に必ず大同小異に過ぎず」と述

べ、当時の日本において社会方言はごく当たり前の現象であったことを示唆している。

表1 江戸時代の社会階層によることばの差（社会方言）

現代共通語	上級武士	下級武士	商人	農民
行けよ	イキナサイ	イキナハイ	イキナハイ	イキナハリイ
どうしようか	ドラシヨラカ	ドラシユウカ	ドゲイシユウカ	イキナハイ
			ドラシユウカ	イキナハイ

また、かつての琉球にも社会方言と呼べるものが存在した。沖縄の首里では、社会階級によって音韻体系までが異なると言われていた（Sihata 1983:21）。二〇世紀前半まで、宮古島では「はい」という応答詞も社会階級によって違っていた。士族が目上の士族には「ウー」、目下の士族には「オー」、平民に対しては相手の年齢と関係なく「ン」を使っていた。一方、平民から見ると士族は皆目上にあたるため、相手が士族ならその年齢とは関係なくもつとも丁寧な「ウー」を使用していた。「オー」は平民が同階級の目上に対することばで、自分より下のものには「ン」が使われていた。これを図式したものには以下の表2である（Sihata 1983:26）。

表2 社会階級とことばの違い—宮古島の例—

話し手	聞き手	使用語形	聞き手	話し手
士族	士族(上)	ウー	士族(上下)	
	士族(下)	オー	平民(上)	
	平民(上下)	ン	平民(下)	平民

現代の日本でも、「社会方言」に当たる言語的特徴が報告されている。富山県五箇山の敬語表現を例に取ると、お年寄りが年齢の半分以下の青年に向かつて、最高の敬語を使い、年下の相手が敬意の低い表現で答えるという待遇表現行動が見られる。現在の共通語からは妙に見えるこの敬語行動では、相手が自分より年上かどうかという相対的な地位ではなく、相手の家の社会的地位という絶対的条件を考慮し、敬語のレベルを選択する。かつて、こうした社会階級とことばの関係が日本各地に見られたが、最近の再調査では、五箇山からその姿が消えようとしていることが分かった (Sanda 1983)。

一九五二年に愛知県岡崎市で行われた大規模の調査では、「あなたは目上の人と話をするとき、うまく敬語が使えますか」など、敬語使用意識に関する質問では、社会階級の差がはっきり表れていた。表3では、一番上の社会階層に属するインフォーマントの半分近くが「目上の人と話をするとき、うまく敬語が使えます」と答えたのに対し、最も低い階層は一割弱に止まっている。また、家庭内で敬語を使用する割合にも階層差が表れている (江川 一九七三、一三七頁)。

表3 日本の敬語に見られる社会階層の差異

社会階層		目上に敬語うまく使える					家族同士で敬語を使う
←下	5	4	3	2	1	→上	
	9.1	20.4	20.8	31.2	47.1		
	35.7	34.0	35.6	49.2	43.8		

愛知に見られたような言語行動や言語意識の差異は現在も残っているであろうが、以上見たような沖繩や大分、富山に見られた社会方言は今では、消えている、あるいは消えようとしている。現在の日本語における「社会方言」は、親族名称や待遇表現 (自分が使う表現・使われる表現) など、語彙体系のごく一部の相違に過ぎず、言語体系そのものが階層によって異なる欧米の「社会方言」とは根本的に異なる。日本には、社会階層によって異なる生活様式、習慣、価値観などが存在するにしても、欧米のように異なる社会階層の人が、異なる言語変種を用いるということはない。

3 アメリカの社会階層による方言差

さて、欧米の社会方言では社会階層によって言語の何が違

地域方言・社会方言 5+ の諸相

うのだろうか。アメリカ英語の場合を考えてみよう。アメリカ南部の大都市アラバマ州のアニストン市（人口六万人）で白人話者の社会階層による方言の差異を明らかにする研究があった。表4のデータ (Feagin 1986: 219) では、話者の社会階層によって、言語使用のかなり大きな違いが見られる。

表4 社会階層による方言の差異(非標準語形の使用率)

不変化の "was"	70.3	2.5	they was ; they were
	75.8	1.1	
多重否定	91.4	2.4	nobody likes him ; nobody don't like him ; nobody don't like him ; nobody likes him
	75.8	1.1	
不変化の "don'ts"	91.4	2.4	he don't ; he doesn't
	75.8	1.1	
労働階層	中流階層	例：標準語訳	

この研究の面接調査でとった自然談話を文字化した後、ある言語事象 (変項 = variable) に注目した。表4では「出現形」(トークン) の割合を算出することによってそれぞれの言語事項の使用率を計っている。例えば、三人称単数形動詞の総数を数えた。中には、標準語形の "he doesn't" と方言語形の "he don't" が両方見られたが、表の数字は方言の変異形 (variant) の割合である。

なお、自然談話で頻繁に使われない変項の場合、全体数が少なすぎるため、出現形の割合を算出してもあまり意味がない。これらの数量化にあたっては、使用頻度ではなく、使用する人を数えた。以下の表5のデータ (Feagin 1986: 219) はイン

タビューで一度でもこの方言語形を使った人の割合である。

表5 社会階層による方言の差異
(非標準語形を使用した人の割合)

完了形の "done"	55%	0%	例：標準語訳
	55%	0%	
非現実的 "like's"	55	0	I like's died laughing ; I almost died laughing
	55	0	
二重キタル	31	6	you might be able to go ; you might be able to go
	31	6	
労働階層	中流階層		

日本で紹介されている欧米社会言語学の例には、ニューヨークのような大都市の場合が多いため、社会方言は大都市だけに見られる現象だと誤解されやすい。しかし、このアニストンに見られた社会方言の差はけっして特殊ではなく、ごく一般に見られる現象なのである。

アメリカでは、標準英語の文法と異なる、いわゆる方言文法は、間違った英語と意識され、非難される。例えば、*do* 動詞の否定形 "isn't" があるが、教養のある人はこの活用形の使用を避ける。あまり教育を受けていない人は、これが標準英語と異なることを知らないから、それを使い続ける。あるいは、それが非標準的であることを知っていても、同じ低

黒人>白人
北部>南部

地域方言・社会方言 5+ の諸相

法として使われている。アメリカ南部は、他の地域よりも応答表現にこうした敬称を頻繁に使い、しかも、その使い方も他地方と違うという研究結果も出ている。

アメリカ南部の大都市メンフィス市で六四〇人の青年層話者を対象に丁寧表現、*str.* と *ma'am* の使用に関するアンケートが行われた (Ching 1988)。インフォーマントは南部全域から集まった大学生であった。しかしながら、南部ではこれらの表現が年上、目上、知らない人などの相手に対してごく普通に使われる日常語である。

全インフォーマント (白人と黒人) のうち、「相手が黒人でも白人でも年上なら使う」と答えたのは八八・二%で、「まったく使わない」のはわずかに七・二%であった (Ching 1988: 21)。そして、この敬称は家庭内でも使われていることが分かった。「自分の親に使う」あるいは「子供の時に親に使っていた」の回答者を合わせると八七・三%に達する。

なお、比較できる南部以外のデータはないものの、一般にはこれらの表現は使われなれないと思われる。(ただし、ビジネス関係で顧客に対する使用はアメリカ各地に見られる。) こうして、日常的な場面で返事をするときに *yes, str.* や *no, ma'am* のような言い方をするのはアメリカ南部英語の特徴と言えるので、地域方言による敬語の違いに当たる。

民族方言の違いもこうしたポライトネス行動に表れている。「両親に向かって使うようにとつけられた」と答えた白人は六二・五%だったが、黒人では三七・二%に止まっている。しかし、話し相手によっては、黒人の使用率が白人を

上回るものもあった。「牧師に対して」という場面では、敬称を使うと答えた黒人は八七・三%であったのに対し、白人は八四・二%であった。四〇歳台では、そのギャップが更に広がり、黒人は白人の倍近くになっている。表7を見てみよう (Ching 1988: 33-34)。

表7 牧師に向かって使っているインフォーマント (民族×年齢)

白人	88.9	黒人	18-29歳	30歳台	40歳台	全体
		90.8%	69.7	68.2	83.3	87.3
			46.9			84.2

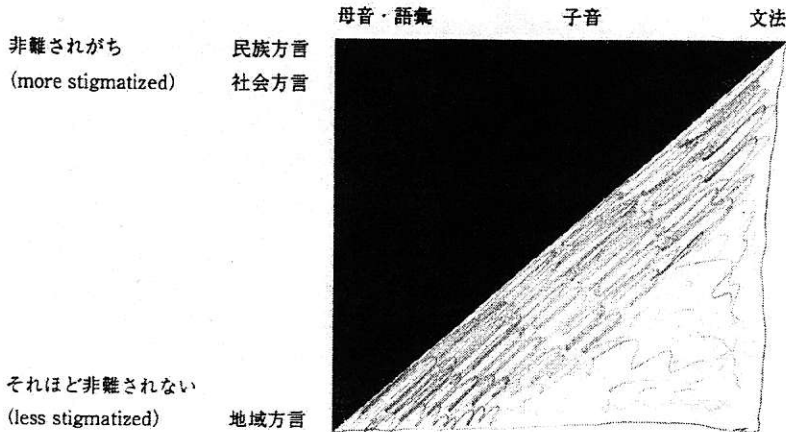
6 地域方言・社会方言と言語形式との関係

アメリカ英語において「標準語」とは、「威信をもつ言語形式」(prestige forms) (発音、語彙、文法事項) と結びついているよりも、「非難される言語形式」(stigmatized forms) と結びついていると考えた方が良さそうである。要するに、「こういう喋りかたをすれば標準米語になる」というよりも、「こういう喋りかたを避けたら標準米語になる」という見方が適切であろう。

また、言語変項によって、かなり非難されるものとそれほど非難されないものがある。よく非難されるものには例えば、「多重否定」(They didn't do nothing)、「過去分詞としての過去形の使用」(She done her work)、「非標準的主語・動詞の一

項

表8 米国の方言における言語変異と「非難」の関係



致 (We was there) がある。これらはいずれも、地域を問わず、全国的に分布するが、一般人にとってこれらは「方言」というより「間違った英語」というふうに見られ、常に非難の的にさらされている。こうした非標準的言語形式を使用する人は「教養のない人」と思われるので、社会階層が高ければ高いほどこれらを避ける傾向が見られる。その結果、これらは社会階層の低い人が使うものという固定観念ができ、社会方言の特徴となったのである。

黒人英語もたびたび非難の対象になるが、様々の特徴の中では、とりわけ文法事項がよく「間違った英語」として話題になる。教養のある黒人も発音を必ずしも白人的な標準英語発音に変えようとは限らないが、黒人俗英語の象徴とも言える「動詞の省略など、標準語と異なる文法事項を避ける強い傾向がこれらの間で見られる。

一方、音声面の特徴は、間違った英語ではなく、単なる「地域の違い」として大目に見られる傾向がある（特に母音の発音において）。したがって、アメリカの国語（英語）教育では、「間違った文法」を取り上げそれらをさけるべきだと教えるが、「正しい英語の発音」を教えることは一般的ではない。（Wolfman and Schilling-Estes 1998、特に第5章 Regional Dialects Social and Ethnic Dialects を参照されたい。）アメリカ英語における言語変異と「非難度」、および方言の種類との関係を表8で示した。

方言文法を「間違った英語」と見るアメリカに比べ、日本の方言に対する認識の方がむしろ健全だと言える。戦前の日

本では、方言は「崩れた日本語」などと非難されていたが、現在、方言は単に地方で使われる文法として意識されている。例えば、関西弁の「行かへん」は、標準語としてはおかしく思われるが、「間違った日本語」だとは考えられてはいない。このような、二つの社会の言語認識の違いの背景には、比較的近い過去に日本語の標準語の基盤が京都から東京へと変化したことが関与していると思われる。

7 海外における日方言研究の価値

外国の学者からみて、日本の方言研究は価値のあるものかどうかについて考えたい。世界の言語を見た場合、地域方言が存在するものはほとんどであるが、社会方言の存在が指摘されている国はさほど多くない。その意味で、日本語のように社会方言がない言語はけっして珍しくない。しかし、これまで、世界的に知られている方言研究では、欧米の事例が大部分を占めていたので、日本語のように先進国でありながら、社会方言のない言語が逆に貴重な研究材料となるであろう。

参考文献

- Ching, Martin K. L. (1988) *Ma'am and Sir: Modes of Mitigation and Politeness in the Southern United States. Methods in Dialectology*, Alan Thomas, (ed), Clevedon: Multilingual Matters, 20-45.
- Reagin, Crawford (1986) *Competing Norms in the White Speech of Anniston, Alabama. Language Vary in the South*, Michael

B. Montgomery and Guy Bailey (eds.) University, AL: University of Alabama Press, 216-234.

Sanada, Shinji 1993. *The Dynamics of honorific behavior in a rural community in Japan. Multilingua* 12-1: 81-94.

Sibata, Takesi 1998. *Urbanization and language differences in social class. Sociolinguistics in Japanese Contexts*, Tetsuya

Kunihiro, Fumio Inoue, Daniel Long (eds.) Berlin: Mouton de Gruyter, 321-333.

Wolfram, Walter A. (1969) *A sociolinguistic description of Detroit Negro speech*. Washington: Center for Applied Linguistics.

Wolfram, Walt and Natalie Schilling-Estes. 1998. *American English*. Oxford: Blackwell.

江川清 (一九七三)「階層と敬語」〔現代の敬語〕明治書院、二一九～二五二頁

真田信治 (一九九二)「日本語のバリエーション」(徳川宗賢・

真田信治編)「新・方言学を学ぶ人のために」世界思想社、二二～二九頁

ロング・ダニエル (一九九二)「言語計画と方言アメリカ」(徳川宗賢・真田信治編)「新・方言学を学ぶ人のために」世界思想社、一五二～一六二頁

ロング・ダニエル (一九九六)「日本語方言との比較から見たアメリカ方言の現在」(小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎編)「方言の現在」明治書院、一三〇～一四四頁

(Daniel Long 東京都立大学助教授)